

阪中正夫拾遺

1

二〇〇一年は、劇作家阪中正夫の生誕百周年にあたる。誕生日(十一月十日)近くの十一月四日(日曜日)には、阪中の郷里和歌山県那賀郡桃山町で阪中正夫生誕百周年記念の盛大なイベントが催され、代表作の「馬」が上演されるほか阪中文学についてのフォーラムが開かれる。

また、それにあわせて皇學館大学教授半田美永氏の編纂になる『阪中正夫文学選集』が和泉書院より刊行された。現代文学における阪中の足跡が、さまざまな角度から検証されつつある。小稿では、半田氏がかつて残された貴重な労作『劇作家阪中正夫―伝記と資料』(一九八八年五月三十日 和泉書院)、『証言阪中正夫』(一九九六年四月十日 和泉書院)などで触れえなかつたことを拾い集めてみたい。

2

恩田雅和

東洋のゴッホといわれた放浪の天才画家がいた。その人、長谷川利行は、一八九一年に京都に生まれ、一九四〇年東京三河島で行き倒れ、孤独のうちに死んだ。その長谷川利行は、和歌山県広川町にあった耐久中学で一時学んだ形跡がある。

しかし、十歳年下で粉河中学に入學した阪中正夫とは、和歌山県内での接点はなかつた。

一九三一年(昭和六年)、二人は東京阿佐ヶ谷の岸田国土の家で邂逅することになる。それも良い出会いではなく、阪中の方は、長谷川にまさに殴りかからんとする勢いである。当時の阪中の生活ぶりもうかがえるので、矢野文夫著『長谷川利行』(一九七四年五月三十日 美術出版社)から第三章「利行のいる風景」の中の「岸田国土と利行」を詳しく紹介したい。なお

矢野は、長谷川利行と交友のあった日本画家で、劇作を岸田国士に師事したことがあり、阪中とは一時兄弟弟子のような間柄だったようだ。文中、阪中のことはすべて坂中に統一されている。

坂中は昭和五年頃、高円寺駅前の素人下宿に棲んでいたことがある。国民新聞の記者をしていた佐々木金之助氏の紹介で、私は坂中を知った。佐々木氏を私に紹介したのは、詩人の村井武生である。つまり、村井武生↓佐々木金之助↓坂中正夫という図式になる。佐々木金之助氏は、のち読売新聞に転じ、さらに読売巨人軍のオーナーとなった。

私はその頃劇作に精進していて、小山内薫門下の竹下英一氏が発行していた演劇雑誌「コメディア」に、「玩具の論理」「道路妨害に就て」等々二、三の戯曲を発表していた。坂中正夫は詩人であったが、当時は戯曲を書き、岸田国士に師事していた。詩人で戯曲を書いているという点で、坂中と私は急速に親しくなった。その当時、発表機関を持っていなかった坂中を、竹下英一氏に紹介し昭和五年（八月号）の「コメディア」には、私の戯曲「シルクハットのローマンス」と坂中正夫の「移民」の二篇が仲よく掲載されている。

私は時々坂中の下宿に泊り、二人で駅前のカフェ「カナリヤ」に、正午頃から夜おそく閉店まで入りびたっていた。私

はよっちゃん、坂中は少し年増のかなえさんという女給さんと仲良くなり、彼女たちは二人で坂中の下宿に遊びに来た。坂中は郷里には妻子もあり、地主である父親からの送金で細々と暮らしていたが、遊ぶ金は自分で稼がなければならぬ。岸田国士氏が、それでは探偵小説か通俗小説で稼げといつて、博文館発行「新青年」の編集者延原謙を坂中に紹介した。（延原謙の妹が、岸田国士夫人であった。）坂中はメロドラマ的才能はあまりないので、私が構想し、坂中の下宿に泊りこんで合作した。原稿は大抵握りつぶして発表されなないことが多かったが、岸田氏の紹介なので、多額の原稿料が、その度に入手出来た。二人の遊蕩費には、少しもこと欠かなかった。突然、坂中の妻君が子供を連れて上京して来た。しばらく下宿で暮らしていたが、岸田氏の紹介で阿佐ヶ谷の岸田邸の近くに、坂中は新居を借りた。この当時、世間はひどい不景気で東京は貸家だらけであった。思い立てばその日のうちに家は借りられた。阿佐ヶ谷には、その頃深い森や林や畑があり、坂中の新居も疎らな林の中にあった。坂中は女給のかなえさんの方に情がうつっていた頃で、妻君に冷たく当たり散らした。私は妻君に同情したが、うかつに仲裁することも出来ない。下手に坂中の機嫌を損ねると「新青年」の原稿料の分け前にもひびく恐れがある。結局、誌上に掲載されずストックにされるお義理の原稿だから、内容など延原氏はあまり吟

味もしないであろう。坂中も私の協力を必要としなければ、稿料も丸々入るわけである。しかし相変わらず私に合作を頼み、徹夜で以前の下宿で仕事をするという名目で家を明け、かなえさんと逢曳していた。

そんな状態が二、三カ月続いた。その頃坂中は私を岸田国士氏に紹介し、私がフランス語をやるといっているので、翻訳の下仕事を岸田氏は私に廻してくれた。「ルナールの日記」やその他、いろいろな翻訳の仕事があり、夭死した辻野久憲や三好達治氏などは、その以前から岸田氏の下訳に精を出していた。

(中略)

長谷川利行が、「二科展に岸田国士像を出品したいから紹介してくれ」といつて来たのは、引越早々の昭和六年の八月下旬であった。早速、岸田氏に利行を紹介し、モデルになって下さいと頼みこんだところ、岸田氏は、快諾した。翌日から制作は始まり、岸田氏はフロックコートに威儀を正し、少し堅くなってモデルを勤めた。四、五日で二十五号の『岸田国士像』は完成した。勿論カンバス代、絵具代はじめ実費はすべて岸田氏が払ったし、揮毫料も利行のいうままに支払った筈である。この作品は『ナチュール・モルト』三十号と一緒に、昭和六年九月の二科会十八回展に出品され、大きな反響を呼んだ。そこ迄は無事だったが、あとがいけなかった。

阪中正夫拾遺(恩田)

一度いい顔をみせると、とことんまで食い下がるいつもの手を利行は使い始めた。私の家の前を素通りして、毎日のように岸田氏を訪ねては、電車賃やドヤの宿泊代、酒代を要求する。岸田氏が留守の時は、夫人や女中からでも小遣いをせしめる。二十銭でも五十銭でも、金を貰うまでは玄関に突っ立つて、無言の行をやる。女中さんなど震え上って怖がった。

坂中正夫がやってきて、「長谷川は怪しからんぞ。夫人や女中にまで金を強要するんだ。まるでゆすりだよ。君から長谷川に注意してやめさせてくれ」といった。しかし、長谷川も私の内心を見透かしているのか、てんで私の家には寄りつかない。紹介者としての私は、面目丸つぶれである。詫びをいうと岸田氏は、「いや別に気にしていないよ」とかえって私を慰めるのであった。が内心の不快は覆いかくせなかった。秋の半ばのある日、岸田氏の書齋に、坂中と私が集り、自作の戯曲を自分で朗読して、岸田氏に批評してもらっていた。戯曲は科白だから、朗読を聞いてもらうのが一番いいわけである。

突然、玄関から案内も乞わずに、つかつかと利行が入ってきた。それは正しく闖入者と呼ぶべきで、私などに眼もくれず、岸田氏の眼をじっと見据えるようにして

「先生、絵具を買うので、どうしても金が要るんです」といった。

岸田氏は一寸頬を紅潮させたが、すぐ平靜な表情に返り、「今、女房が外出しているんで、財布のありかもわからない。明日でも出直してくれ給え」といった。

「いや、どうしても今日金が要るんです」と、長谷川は一向にたじろがない。じつと立ったまま瞑目して、引き退る気配は見せない。きまづい沈黙が続いた。その沈黙を破るように岸田氏がいった。

「長谷川君、君も画壇の大家なら、僕も文壇の大家のはしくれた。お互いに大家らしく、つき合おうじゃないか」

長谷川は急にかつと眼をみひらき、大声を發した。

「僕は少なくとも大家じゃありません。一介の貧乏絵描きだ。今日はどうしても金が要るんだ」

「何をッ」坂中正夫が顔を紅潮させ、カツとなって立ち上がった。瞬間、私も立ち上がって、坂中の肩を押さえて制止しながら、

「長谷川、今日はおとなしく帰れ。お前が金をゆるする権利はどこにあるんだ」そういつて、長谷川の肩に手をかけて、強引に外に連れ出そうとした。しかし長谷川は一語も答えず、足をふん張り、私に抵抗した。坂中も立ち上った。途端に岸田氏は私を制して、

「長谷川氏も急に金が要るんだらう。そんなら本棚の本を、どれでもいいから持って行って売ってくれ給え」といった。

長谷川は平然として、

「風呂敷を貸してもらいます。大きい方がいい」と言い放った。岸田氏は女中を呼んで、大風呂敷を持って来させた。利行は悠々と大風呂敷を本棚の下に敷き、ドサドサツと手当り次第に、本箱から数十冊の本を引抜いて包みこみ、やつこらさど肩にかつぎ一礼もせず、悪鬼のように眼をギラつかせて黙って出て行つた。坂中が「この野郎！」と後を追おうとするのを、岸田氏は制した。「ほっとき給え」

紹介者の私の立場など、この場合の利行は微塵も考えていない。糞喰らえである。

その晩、坂中と私は、阿佐ヶ谷中の古本屋を駆け回って、利行が売りとばした岸田氏の本を、回収して廻つた。岸田氏としては何とも後味の悪い出来事であつたらう。私もこの事件以来、次第に岸田氏と気まづくなつたことは事実である。

長谷川利行が描いた「岸田国士像」は、現在、東京国立近代美術館が所蔵しているとのことである。

長谷川と阪中との衝突もさることながら、矢野の文から、阪中が雑誌「新青年」用に小説を矢野と合作していたこと、またその頃、阪中に、「カナリヤ」の女給でかなえさんという親しい女性がいたことがわかり、興味深い。

一九三三年（昭和七年）当時に、和歌山市で「水曜」という同人誌が刊行されていた。

一九三三年十月一日発行の「水曜」第九号に、「水曜社一年史」が掲載されているので、それを見ると、水曜社の創立は一九三三年九月二十五日で、「かたよらざる文芸を通じて同人各自の親睦を図り併せて地方文芸運動を起さんとする同志相よりて水曜社をここに創立す」として、同人に安井純星、蟹井忠治、森川伝治、楠見勝寛の四人の名が連なっている。

「水曜」の創刊号は、一九三三年十月十日発行で、部数は、謄写版わずか八十だった。

翌一九三三年二月二十五日発行の第四号では部数が一五〇になり、「沖野岩三郎氏、松岡英之助氏、高澤氏等々諸名氏の御激励を多数頂戴いたしました」の記事も見られる。

同年八月一日発行の第八号では、部数が一挙に七〇〇に増え、「保田龍門氏、野口道方氏、六条篤氏、木下克巳氏、古村徹三氏の御寄稿を得一段と紙価を高めました」とある。保田龍門は、一九二三年二月、フランスでマイヨールに会見した模様を「マイヨールの談片」と題して報告している。

さて、「水曜社一年史」が載っているこの第九号に、蟹井忠治が、「阪中正夫氏を見好村三谷に訪ねるの記」を書いていた。

阪中正夫拾遺（恩田）

（註・恩田未見。見好村三谷は、現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町三谷で、阪中の妻花子の里である。）

この号の編輯後記には、「改造『馬』『鯨』の著者坂本正夫氏の御後援を賜る。蟹井記『先生をお尋する記』をお読み下さい」ともある。

そして、一九三三年十一月一日発行の第十一号（同号の編輯後記に、「今号は第十月号を二足飛びで十一月号とした。これは原稿と印刷店との関係で、この儘号を追つては一寸遅れるからである」とある）に、阪中正夫が「『水曜』への便り」を寄稿している。

「水曜」への便り

阪中正夫

わたしは郷土が嗜きで、その癖どつちかと云ふと郷土の人には餘り親めない方であるらしい。東京へ出て十年、郷里に持つてゐたその頃の友人を今ではすっかり失つてしまつてゐる。時々昔のことを思ひ出して會つて見たく思ふふこともあるが、一体、舊友と云ふものは、思ひ出にとどめて置く方が、何時の場合でもいい結果に終り勝ちであつて、遺憾ながらそれを知つてゐるわたしは、時たま會ひたいと思ふやうな心動かさることがあつても、大抵の場合はよしてしまふ。

そして考へて見れば、今のわたしの立場からしてもまたど

んな懐古的な悦びを悦びとする、安閑とした境遇でもない。今のわたしには、新しい友達こそ望ましいことで、わたしはそれ等の人々の好意の中にこそ、これから伸びて行けるんだと云ふ気がするのである。

今度、郷土に帰つて来て、わたしは水曜の人々の好意に大変嬉しいものを感じさせられた。比較的皆新しい友情で、皆んな今度帰つて来て、初めて顔を合せた人々であるが、色々御世話にもなつた。郷里でこんなに親しい人が大勢出来たことは、わたしには初めてで、何かしらまた郷土と云ふものが僕に居心地のよい土地になりさうである。

これは僕にとつて大きな収穫で、田舎に材料を取つたものを書きながらも、いろんなことを思ひ出すと、郷土の人事はわたしには嫌で嫌で、これまでたまらなかつたもんだ。

兎に角、貸部屋から、プラーリと出て来ると、和歌山にも気持ちのいいお茶を飲む店がある。あんたがたが教へて呉れたんだが、わたしの気持ちのいいあそこは店である。真の鈴のブラサがつた下で、四五回あんた方と話し合つたことも忘れないで置きたいもんだし、あの鈴のある店も忘れんで置いて、次に来た時に、また行つて見たいもんである。

多分後二三日で、わたしはまたこの和歌山から去つて行く積りであるが、兎もあれ、わたしには今年の郷土の夏は悦ばしい気持ちで過ぎて行つた。

「水曜」の若い同人たちと出会つて、阪中には「嫌で嫌で、これまでたまらなかつた」「郷土の人事」が、多少なりとも好ましく思うようになったことがうかがえる文章である。

ここからわかるように、阪中は一九三三年夏、しばらく郷里で滞っていたようだ。第十一号編輯後記に、「九月の座談会は本文の如く素晴らしい盛会。殊に文藝春秋の執筆中にてお忙しい阪中正夫氏の御出席を得て一同感謝してゐる」とあるので、九月の初めまで和歌山に居たようだ。

この「水曜」が何号まで続いたのかは不明である。従つて、阪中がいつまで「水曜」と関わり続けたのかも判然としない。

4

同人誌「水曜」の第十一号に、蟹井忠治著の童話集「あり巻になつたママ・外十数編」の出版予告が掲載されている。「和歌山童謡界の新人にして実演に創作に独自の世界を持つ蟹井忠治氏の童話集が近日刊行されることになりました。秋の児童の好読物として各御家庭に御すすめます。」定価五十銭とあって、「阪中正夫序・小出卓次画、十月下旬刊行」と書かれてゐる。

蟹井忠治の童話集「襟巻になつたママ」は、この予告が載つ

た翌年の一九三四年七月十七日、和歌山県童話連盟から刊行されてきた。童話は、表題作のほか「五色豆」「四輪馬車」など計十一篇収められており、画は羽山金次郎が描き、序文は、沖野岩三郎と阪中正夫が書いていた。このうち阪中の全文を掲げる。

序

阪中正夫

教鞭をとる身で、童話を書いて、それを自らの教え児の前で、話して聞かせるとは、誠に楽しいことに違ひない。僕は君のその境遇を実に羨ましく思ふ。

僕が君を嗜きなのも、さうした境遇の君が嗜きなので、そしてその境遇が、また君を高からしめてゐるのではあるまいか。

僕は他人の尊著に、自分の悪文を添える恥を、出来得るならばしたくないと考へている一人で、その点では君は僕の芳樹の枝から、最初の新鮮をむしりとつた男なのだ。(青柿泥棒は、僕にだつて既に二人や三人はあつただからねえ)

兎に角、僕は君が嗜で、嗜きな君の書いた作品だから、この童話もまた嗜きである。これ等の君の作品が、必ずしも傑作でなくともいいさ。君はこれを第一階梯に残すものとし給へ。それにこの童話を読んで、多くの児童が、既に児童の悦

びの単純さでもつて、君の童話作家としての才能を讚美してゐるではないか。それで君は充分満足すべきであると思ふのだ。童話作家の才能は児童の声に耳を傾けやれるその愛と正比例してゐると考えることは、正しい考へだからねえ。

ちなみに蟹井忠治氏は、和歌山県那賀郡粉河町に在任し、長年小学校教育に携わつて和歌山市立広瀬小学校校長を最後に退職、一九七二年八月八日六十三歳で死去している。

5

一九四〇年十月十五日、大政翼賛会が発足し、岸田国士が文化部長に就任した。阪中が奔走して、同年十二月二十七日大政翼賛会和歌山県支部も発足したことは、半田美永氏による阪中略年譜に記されている。

翌一九四一年四月、大政翼賛会和歌山県支部から和歌山文化劇団が誕生していた。阪中は、郷土史家の喜多村進、南幸夫らとともに劇団委員の一人に名をつらねていた。

この年七月十二日夜、和商講堂で、和歌山文化劇団による第一回非公開朗読試演会が開催された。内容は、ミドリ幼稚園児の児童劇「三匹の小熊さん」のあと岸田国士作「葉桜」、阪中正夫作「田舎道」、三好十郎作「寒駅」が演じられた。

「田舎道」の配役は、老爺島栄一郎、老婆西郷隆子、息子竹田武雄、孫娘川端きよ子である。

続いて、一九四二年三月十四日と十五日の両日、和歌山市公会堂で、和歌山文化劇団の第一回公演が行われた。この公演の主催は、劇団と和歌山市で、後援は、大政翼賛会和歌山県支部である。

公演のパンフレットに大政翼賛会文化部長と肩書きのある岸田国土の文があるので、引用してみよう。

大政翼賛会文化部長 岸 田 国 士

和歌山に新しい演劇運動が起り、私の友人もこれに参加してゐることを知つたのですが、由来地方で行はれるこの種の運動は、云はば同好の士の集りといふ以上に出ず、単に興味的な催として深くその土地の文化を育成するといふやうな役割を果たしてゐるものが少いと思ふのです。ところが、和歌山のそれは、その機構に於て、その抱負に於て、さすがに時代の要求に応じるものがあり、はつきりした指導精神の下に、着々成果を挙げつつあると聞き、まことに心強い限りであります。

演劇は作るものでなく、生れるものだといふことは、すべて芸術の道に通ずる真理であります。特に今は、いろいろな方面で盛んになりつつある素人演劇のために、私はこのこ

とを声を大にして叫びたいのです。即ち、自分たちの「生活」をはなれて演劇の生命なるものはないのであります。

和歌山には和歌山の芝居がなければなりません。そして、それが出来あがる道程に於て、ほんたうの新しい日本の演劇が生れるのだといふことを私は確信いたします。

さて公演は、武者小路実篤作「だるま」、岸田国土作「驟雨」、阪中正夫作「峠」、三好十郎作「寒駅」の四作品が上演された。阪中の「峠」は、島栄一郎演出で、梅吉爺さん島栄一郎、甚五郎山本恵三、おやす吉井さつき、おくに扇珠子、おきよ川端きよ子の配役である。パンフレットに、「本作品は先の国民精神総動員連名の依頼で素人劇用脚本として作者の書いたもので谷間の部落の更生を描いて現在諸劇団で公演されつつあるもの」とある。

なお、この時の阪中は、劇団の同人に名をたらねているほか、「指導」ともなつていて、この公演全般を指導していたこともうかがえる。

(おんだ まさかず・和歌山放送)